

式辞

平成 28 年度大学院入学式

本日、桜満開の世田谷キャンパスにおいて、平成 28 年度日本体育大学大学院体育科学研究科の入学式が挙行されますことは、大きな喜びでございます。

日本体育大学大学院体育科学研究科に入学された新入生の皆さんに、大学院担当の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎を申し上げます。また、ご列席のご家族の方々にも心からお喜び申し上げます。

本日、入学された皆さんは、入学許可でも示されたように、博士前期課程が 42 名、博士後期課程が 11 名です。まずは入学おめでとうございます。

本学の大学院は、1975 年に体育学研究科(修士課程)が開設され、その後、1998 年には体育科学研究科博士後期課程を開設して、現在に至っております。この間、多くの研究者を世に輩出し、大学はもちろんのこと、様々な研究機関やスポーツの現場にも数多くの人材を送り込み、日本のスポーツ界をリードしてまいりました。こうし

た実績を持つ本学の大学院において、近年、最も重要視されているのが、研究者の倫理の問題です。これは本学のみならず、学問の世界の全体の中にわかに叫ばれてきたことであるのは皆さんも承知のことと思います。

そこで、この倫理の問題を生活世界の問題に例えて、お話ししたいと思います。私たちは、一生を終えるまでに、実に様々な共同体と関係性を持ちます。例えば、学校に入学することで出来上がる友達の共同体。同じスポーツを実践する人々の共同体。あるいは地域社会における共同体など、いくつもの共同体の一員として社会参加しています。さて、こうした共同体には共同体固有の文化や規範、あるいは知識や認識といったものが存在しています。この中の規範は、時に法律やルールといった明文化されたものとして共同体に示されることがありますが、そうではなく暗黙の了解事項や暗黙知として獲得されることも少なくありません。例えば私たちは、スポーツを始めるにあたって、ルールを覚えてから始めるのではなく、実践を通してルールを学んでいきます。しかし、だからと言って、その後ルールブックを丹念に読む人は少ないのではないのでしょうか。例えば、あの分厚い野球のルールブックを読んだ、プロ野球選手はどれほどいるのでしょうか。

このような事実からわかることは、実践という経験を通して身に着けたことが、いつの間にか規範として理解されてきたということです。

実は、学問の世界もこれまで同様のことが起こっていました。大学院という共同体に入り、そこで見よう見まねで研究の仕方とそれにまつわる倫理を学んでいく。とりわけ、徒弟制社会における師匠と弟子の関係での学びであったわけです。

しかし、こうした学問の世界の認識は、既に終焉を迎えました。学問の世界の認識そのものが、実践の中で倫理を学ぶのではなく、最初に倫理を学んで、それをベースにしながらか実践を積み重ねていくという時代が到来しています。共同体の話でいうなら、今まで暗黙の了解事項であったものが、明文化され、それが可視化されることで、その共同体に身を置く人々ひとり一人に可視化した内容を内在化させるという変化です。

皆さんが、大学院に入学したということは、間違いなく学問の世界。つまり、学問の共同体の中に足を踏み入れたということになります。そこで博士前期課程の皆さんには、はじめて学問の共同体に

身を置くわけですから、まずはこの共同体での基本的な規範を身につけることを意識しながら、一方で研究を進めていくための、方法論や理論的な考え方を学んでください。世にいうアカデミックライティングを内在化させることを目指してもらいたいのです。

次に、博士後期課程の皆さんには、すでに研究者としての倫理を理解し、それをわきまえているとは思いますが、後期課程での研究に先立って、もう一度、研究者の倫理とはなにかを自問自答してください。そして博士後期課程での研究は、研究者として羽ばたいていくための登竜門となるわけですから、悔いの残らないようにしっかりと学問と向き合ってください。人生の中で真摯に学問と向き合うことができる貴重な時間になるはずです。

最後になりますが、新入生の皆さんの学問への想いが本学の大学院で花開くことを願って、私の式辞といたします。

平成 28 年 4 月 3 日

日本体育大学大学院体育科学研究科

研究科長 石井隆憲